

人が同じ話を何度もするとどうなるか？： 繰り返しのよって生じる物語独話の変化

What happens when you repeat the same story many times? : Changes caused by narrative retellings

保田 祥^{†‡}, 荒牧 英治[†],
Sachi Yasuda, Eiji Aramaki

[†]東京大学, [‡]国立国語研究所

The University of Tokyo, National Institute for Japanese Language and Linguistics
yasudasac@gmail.com

Abstract

Retellings are performed as lectures or presentations. However, little is known on the retellings, such as how many times we need to repeat to tell the story well, or the story is needed to repeat to be good. This paper investigates the story changes while retelling. The experimental results reveal that many words have replaced others for retelling. However, retelling makes no change about the narrative structure and keywords.

Keywords — Narrative, Retellings, Repetition, Cognitive Linguistics

1. はじめに

講義やプレゼンテーション、成功／失敗談など同じ内容を何度も話す機会というのは日常生活に多い。この際、まったく同じ内容を機械的に話すわけではなく、聴衆との関係性に応じて話を変化させるのが普通である。では、同じシチュエーションであれば、話を変える必要がないのかというと、その場合でも話を変える事がある。分かりやすくするために変える場合もあれば、単に話者が飽きた場合もある。では、どのような部分が、どのように変わるのであろうか？このような、同じ話の繰り返し（以降、本稿では **Retellings** と呼ぶ）については研究が少ない。

本稿は、**Retellings** により生じる物語の変化を、主に表現の点において調査する。具体的には、**Retellings** により、物語に変化があるのか、またそれは洗練される方向への変化なのかを調べる。そのため、物語の構成の変化や語の頻度変化、関連研究に特徴的とされる現象など、多角的な調査を試みる。

2. 関連研究

2.1. 物語

Retellings は、話（以降、物語）が繰り返されたものであるが、繰り返しを行わない一回きりの物語に関しては多くの研究がある

Labov (1972; Labov & Waletzky, 1967) は、物語 (narrative) を時間的な関係 (temporal juncture) を持った基本単位 (narrative clause) の連続と定義し、物語の構造が、abstract, orientation, complication, evaluation, resolution, coda の6層から成ると説明した。浜田 (2001) は、物語が、再前景、前景、背景、コメントの四層構造から成ると説明した。

Shiffrin (1981) は物語 (独話) に見られる特徴的な表現として、時制に着目し、過去形を多用するのではなく、歴史的現在形へのスイッチが行われることを示した。日本語では池上 (1986) が物語に歴史的現在形の頻度が高いことを示し、過去形と現在形の交替の要因について、意味的構造から説明を行った。このほか、Silva-Corvalan (1983) によるスペイン語の物語 (独話) における時制とアスペクトや、伊豆原 (1998) の日本語独話における指示詞の分析などもある。

以上のように、一回きりの物語に関しては、その構造、表現について知見があるが、いつ、それらの構造／表現が生まれるのか、については知られておらず、本研究の動機となっている。

2.2. 物語を繰り返す個人の上達

本研究で扱う **Retellings** と同様に、同一人が同

内容の話を繰り返す研究としては、犯罪／事件などの証言研究がよく知られており、記憶の変化が着目されてきた。Loftus (2003) は、記憶が失われると同時に新しい記憶が作られ、入れ替わって行くとしている。また、何度も証言を繰り返すことで、証言内容に変化が現れるほか、誤った記憶が増加することも言われている (Koriat, et al., 2000; Roediger & McDermott, 1995)。

反対に、Retellings によって、自己説明に伴う理解向上 (Chi, et al., 1989) という効果も報告されている。以上のように、証言研究では、記憶の曖昧さに関する知見を主に扱うが、本研究では記憶の変化だけでなく、表現のされ方自体も扱う点が新しい。

2.3. 繰り返される物語の洗練

同一人でなく、複数人によって物語が繰り返される現象 (本稿では、伝聞と呼ぶ) に関する研究も多い。

噂 (Rumor) の分析を試みた Allport & Portman (1947) では、picture (剃刀を持った白人とスーツを着た黒人の口論) を用いた伝言ゲームの実験によって、主に leveled (短く、または簡潔になる)・sharpened (関心による詳細の消失または部分の強調)・assimilated (先入観などにより整合性が生じる) の諸現象が見られた。

しかし、Urban Legends のように、Retellings によって、Allport らの示した現象とは反対に、物語が長くなり、詳細が付加されるとの報告もある (Brunvand, 1981)。また、情報が具体化した場合、情報の変容が少ないとの報告がある (Arndt, 1967)。

なお、西阪 (2003) は、「物語を語る／聞く」と「解説をする／聞く」の参加構造では、発言の組み立て方が異なるとした。このように、語り手と聞き手の立場の違いの影響がある。

さらに、伝聞に関しては、内容の変化だけでなく言語的な変化も着目されている。有元 (1996) は、文単位の伝言ゲーム実験によって、音声 (唇音性交替・類似音への変化)、移動 (順序の入れ換

え・自然文への修復)、挿入 (新語彙の挿入)、変容 (連想・同意味の別語彙)、簡略化 (脱落・反復を避ける) が見られたことを示した。

表 1 に Retellings に関連する諸研究の、個人または複数人によって繰り返されることとの関係をまとめた。

本研究は、個人の Retellings を行う点が新しい。Retellings によって、①何が変化するのか、それは②話者の上達と関連するのか、多角的な調査の報告をする。

表 1 繰り返す個人と繰り返された物語

| Retellingsに関連する研究例 | | | 複数人 | 個人 |
|--------------------|--------------------------|--------------------------|-----|----|
| 証言 | 伝聞法則 | 不確実 | ✓ | |
| | Loftus(1996) | 主観的意味づけ | | ✓ |
| 伝言ゲーム | 有元(1996) | 類似音への変化 | ✓ | |
| | | 順序の入れ替え | ✓ | |
| Rumor | Allport & Portman (1947) | shorter and more concise | ✓ | |
| | | details left out | ✓ | |
| | | emphasis | ✓ | |
| | | assimilated | ✓ | |
| Urban Legends | Brunvand (1981) | add details | ✓ | ✓ |
| マーケティング | Amdt (1967) | 情報変容:クチコミ<流言 (目的→変容が少ない) | ✓ | ✓ |
| エスノメソロジー | 西阪 (2003) | 語る／解説による異なり | ✓ | ✓ |
| 自己説明 | Chi (1989) | 理解向上 | | ✓ |

3. 実験

まず、Retellings コーパスの構築を行った。繰り返す物語は怪談とした。怪談をテーマとした語りを扱うのは、怪談というジャンルの構造や表現の分析が試みられている (水藤 2005, 楠見 2005) ためである。怪談の表現として、擬音語・擬態語や比喻表現によって身体経験を類推させる特徴が言われるほか、不確実性やサスペンス (未決感) を有するという構造上の性質があり、特徴的な語や構造の変化が確認しやすい。また、Urban Legends のように収集対象 (Brunvand など、前出) ともなり得ることから、一般的に語られやすいテーマと考えられる。

3.1. 実験協力者

実験協力者は以下の 3 名で、実験は 1 名ずつ個

別に行った。

実験協力者① 20代・女性・東京都

実験協力者② 30代・女性・茨城県

実験協力者③ 20代・女性・神奈川県

3.2. 材料

既存の物語では、個人の記憶による先入観の影響が予測される。そのため、4分間程度の新規な怪談を3本作成した。準備した材料は、怪談であることを考慮し、それぞれ擬音語や擬態語などのマーカーとなり得る特徴的な語を含むほか、物語の結末部分は曖昧な（不確定で未決感がある）ものとした。

3.3. 実験のながれ

実験協力者は怪談を聞いたのち、その怪談について3回の **Retellings** を行った。怪談は3種類を用意したため、各人9回の語りを行った。語りに関しては、怪談として他の人に伝えるよう話すとの指示をした。

3.4. 実験環境

実験環境は下図のように、ビデオカメラと録音機により、録音と録画を行った。聴衆の影響を除去するために、聴衆は設置しなかった。実験協力者は以下の配置で録音機に向かって話した。

↓□（ビデオカメラ）

↓■（録音機）

↑○（実験協力者）

4. 結果

4.1. 調査項目

Retelling を行うことによって、物語にはどのような変化が見られるのであろうか。まず、自己説明効果として、理解が向上し、聞いた物語が自分の物語となる可能性がある。同時に、飽きることで語り手自身にとっても面白い物語にしようとする可能性もある。よって、物語構造の変化が期待されるため、繰り返された物語における構造（本

稿では、話段と呼ぶ）の変化を見る。

また、同一人が立場の変化なしに同じ物語を繰り返すため、物語の上達、もしくは繰り返しに飽きることによって、表現を変化させる可能性も考えられる。これにより、語句の入れ替えなど、表現にバリエーションの現れることが期待される。よって、語の保持される割合を調べ、出現した語の変化を確かめる。物語の上達とも関連し、フィラーや言いよどみが減少するかどうか、また、物語独話に特徴的とされる表現に変化が生じたかについても見ておく。

すなわち、以下の4点を調査する。

- 話段ごとのボリューム（4.1.1節）
- 語句の保存率（4.1.2節）
- フィラー／言いよどみの量（4.1.3節）
- 特徴的表現（4.1.4節）

4.1.1. 話段ごとのボリューム

本稿の実験においては、**Retellings** によって物語の構造が大きく変化するということはない。物語の筋は同一のまま保持されているといえる。そこで、物語構造に関わる話段を確かめた。ここでは、物語の中の内容のまとまりを話段¹と呼ぶ。各物語は5つの話段から構成されている。

図1は、実験協力者個人の、物語の回数毎における、話段別の語数割合を見たものである。

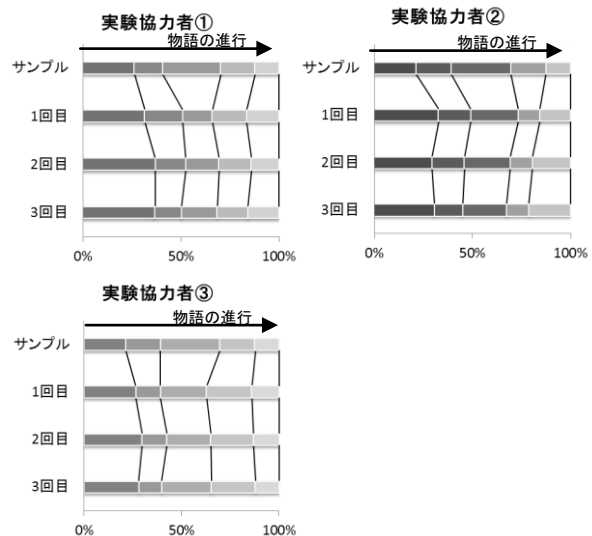


図1 **Retellings** による話段の割合変化例

¹ ザトラウスキー(1993)は、「談話の内部の発話の集合体が内容上のまとまりをもったもの」と定義する。

図のグラフにおける横棒の区切りは、サンプル内の話段を表し、上から一回目～三回目の内容を表す。「三分程度で」と依頼していることもあり、語数には変化が少ないため、割合で示した。物語の進行は左から右であり、100%は物語の終了を表している。

図1から、三人全員が、特定の話段の説明量を変化させることがなかったとわかる。話段については、Retellingsにおいて変化が少ないのだといえる。但し、サンプル（聞いた物語）とも大差がないことから、記憶した物語をそのまま再現しようとしている影響は考えられる。

4.1.2. 語句の保存率

まず、Retellingによって語数の変化があるのかを調査した。図2に、実験協力者毎の各回数の物語における使用語数（延べ語数）と異なり語数を示す。使用語数は実験協力者各々に増加あるいは減少がみられている。しかし、共通した特徴はない。

一方、異なり語数は変化が少なく、ほぼ一定であった。これは、同内容の物語を繰り返しているため、異なり語数は一定量に保たれるものと考えられる。

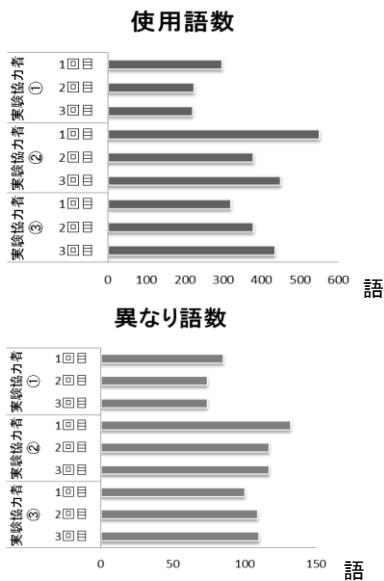


図2 Retellingsによる語数変化例

次に、物語を構成する語の変化を調査した。こ

れは、自立語の出現頻度別の増減を集計することで行った。

図3は、以下に定める自立語の出現頻度の変化率を示す。

語 w の変化率 = $|\text{Freq}_{n+1}(w) - \text{Freq}_n(w)| / \text{Freq}_n(w)$
 ここで、 $\text{Freq}_n(w)$ を n 回目の物語における語 W の頻度とする。

自立語は出現頻度によって以下の3つにグループ分けした。上位頻度（各回平均2回以上）、中位頻度（同1回以上）、下位頻度（それ以外）。

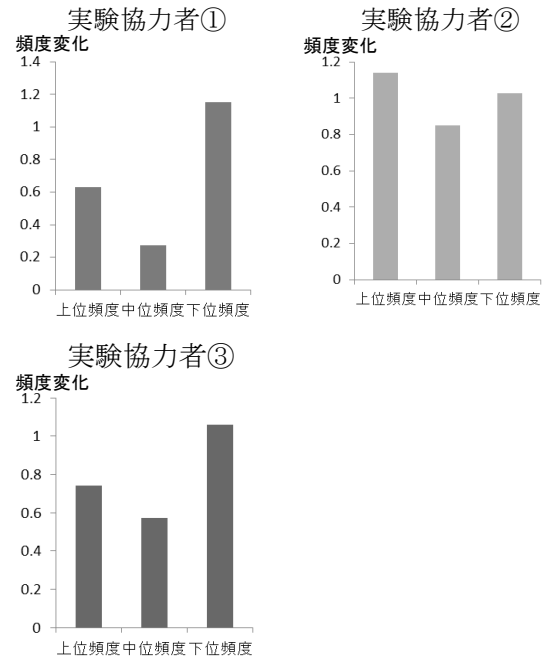


図3 Retellingsによる自立語の頻度変化率

個人差はあるものの、共通して、下位頻度 > 上位頻度 > 中位頻度という順位で頻度変化が起こりやすい。

さらに、表現の変化を見るために、Retellingsにおける、語の保持度合を確かめる。図4に、繰り返された物語における語の、出現（保持）・脱落・言い換えなどの変化種別ごとの割合例を示す。

図4のグラフでは実験協力者ごとに各物語3回分を対照した割合を示している。たとえば「単出」は当該回数にのみ出現した語の割合を、「なし」は当該回数にのみ出現していない語の割合を、「言い換え」は他回数で出現した語（句）の割合を示す。

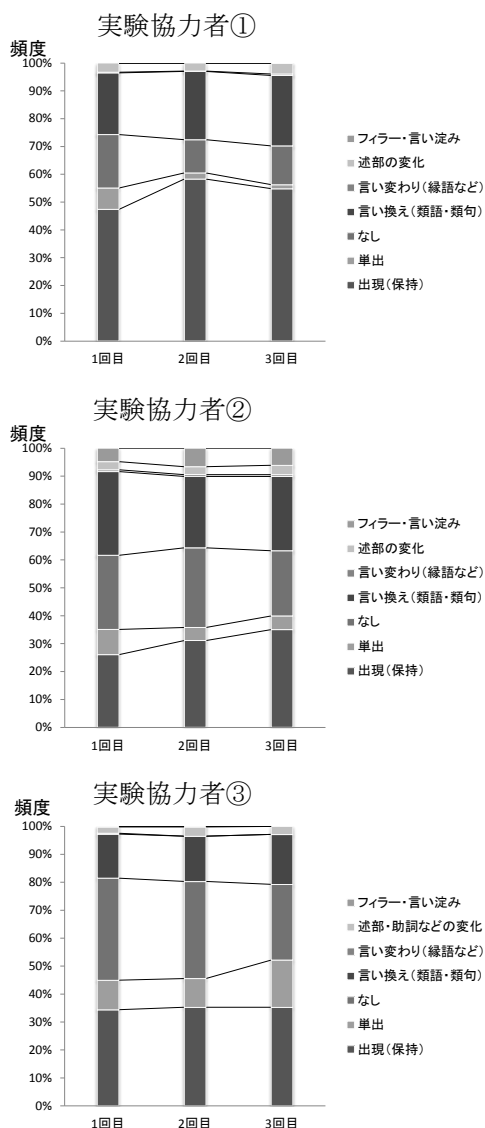


図4 Retellingsにおける語の変化種別割合例

本稿の実験では、同一人が短時間で Retelling を行ったため、記憶の変化はほとんど生じていないといえる。たとえば、意味の異なる別の語（主に縁語であるが、意味が反対になる例：「引き起こし」→「押し開き」などのほか、ある種類似たものになる例：「防空頭巾」→「防災頭巾」・「白」→「銀色」・「持つ」→「取る」などが見られる）へ取り替える割合は、どの実験協力者においても 0.6%未満と共通して非常に低い。

また、新たに出現する語と脱落する語の割合は個人差がみられるが、言い換えるのではなく、類語や類句への入れ替え（たとえば、「聞いています」→「言われています」・「扉」→「ドア」・「来年」→「翌年」・「それが終わってから」→「その後」

など）が行われる割合は、2～3割であり、個人差は少ないと考えられる。

4.1.3 フィラー／言い淀みの量

そのほか、「フィラー・言い淀み」についても割合を確認した。

フィラーや言い淀みは 0～5%と出現量に個人差がある。図4においては、たとえば実験協力者②のグラフに 5%程度を確認できるが、回数を重ねることで話す技術が上達し、減少するものとも言い難い。フィラーや言い淀みが見られる場合、一定の量が保持されていることがわかる。

上達とは反対に、記憶が曖昧になり、思い出しながら Retelling を行うために、フィラーや言い淀みが生じる可能性も考えられる。しかし、言い換えにおいても意味や内容の変化がほとんど見られないこと（完全に別の語に取り替えられる割合は 0.6%以下）、フィラーや言い淀みの量の変化も見られないことから、Retellings によって変化するともいえない。

4.1.4 物語に特徴的な表現

最後に個々の語の変化を調査した。特徴は見いだせなかった。物語独話で着目される時制表現の変化有無や、指示詞（ソ形の減少など）の変化については、本実験結果においては、Retellings で一般的に変化するとも言い難い。

また、図4に「述部の変化」と示した割合でもって、テンス・アスペクトが入れ替わる割合を確認している。図4から、述部に変化のみられる割合は、共通して 3%前後で一定していることがわかる。独話においては、述部が過去形から歴史的現在形へのスイッチする傾向が言われている（Shiffrin 1981, 池上 1986）が、Retellings によって、過去形から歴史的現在形への変化が進むということとはなかった。反対に歴史的現在形から過去形に変化する場合も見られ、変化は単一方向でもない。

4.2 個別の現象について

本稿の実験結果では、3回の Retellings においては、内容や構造の変化がほとんどないということがわかった。但し、内容の変化に関わる点でも、記憶による影響が僅かに現れる場合はあり得る。

表現の変化（類語への言い換えなど）が見られる場合、内容に影響のない範囲で語句の入れ替えが行われるが、異なり語数（使用語彙数）はほぼ変化しない。Retellings によって変化する語は、上位頻度語と下位頻度語に多い傾向がある。中頻度語には内容に関わるキーワードが含まれ、出現頻度が変化しにくくなっていた。

本稿の実験結果と関連研究との対応は表2の通りである。実際に確認できた現象例を表内に示した。

表2 関連研究との対応

| 本稿の実験で確認できた現象 | | 関連研究 | |
|--|--------------------------|--------------------------------|--------------------------------|
| 例 | | 呼称 | 代表的論文 |
| 引き起こし式→押し開き式 | 変化することがある (各レベル) | 不確実 | 伝聞法則 |
| 息を潜めて→怯えて/不思議な雰囲気→不気味 | 解釈の見られる 意味づけあり | 主観的意味 づけ | Loftus (1996) |
| ちりんちりん→ちりちり/ぞろぞろ→ずらつと | 個人差あり・ あまり変化しない | 類似音への 変化 | 有元 (1996) |
| 「～ので」→「なぜなら～」 古い校舎→学校へ行く⇒学校へ行く→校舎は古い | 句・文レベルで生じる (⇒語段レベル) | 順序の入れ 替え | |
| 「ほくろの位置や何かが少しずつ～」→「所々違う ところが～」 | 部分的に生じる (句レベルで多い) | shorter and more concise | |
| 「鹿鳴館～」/「もしかしたら～」/「なんとなく～」 「特に～」 | 部分的に生じる (語段レベルであり) | details left out | Alport & Portman (1947) |
| 「～しまえば」→「～した瞬間」/「そっくり」→ 「まったく同じ顔」 | 部分的に生じる (語レベルで多い) | emphasis | |
| 「女性がいるとわかっていて」→「同じ建物の中には ～見えたりもする」→「近くの会場では大勢の 人が踊ったりしている様子が～わかっている」 | 生じる場合がある (特に詳細で変化) | assimilated | |
| 「月明かりに照らされ」「届きそうで取れなかった」 「子どものようにも見える」 | 部分的に生じる (特に思い出しによる追加) | add details | Brunvand (1981) |
| 「行列でした」→「行列をつくっています」 | 言い変わり (語・句レベルで生じる) | 理解向上 | Chi (1989) |
| 物語の構成・展開など | ほぼ変化しない | 物語構造 | Lavov (1972など) |
| 「待っているんです」→「待っていました」 「思われました」→「思うのです」 | 変化方向は混在する | 過去→歴史 的現在への 時制変化 | Shiffrin (1981) 池上(1986) |
| 「その廊下」→「いつもの廊下」→「その廊下」 | 変化するともいえない | 指示詞の変 化 | 伊豆原 (1998) |

5. まとめと展望

同人物が同内容の物語を繰り返す Retellings によって、①構造をはじめ、物語（独話）に特徴的とされる諸現象には、大きな変化が見られない。また、②話者の上達か物語の洗練が生じるのだとすれば、内容に影響のない範囲で語句の入れ替えが行われる。

本研究によって、Retellings によって主に変化するのが語彙であり、高頻度に用いられる語も言い換えられることがわかった。

使用語彙数がほぼ変化しない場合、Retelling を行うに際し、語句順序の入れ替えを実施するほ

か、語の入れ替えが行われる。但し、中頻度の語は変化しない。内容に関わるキーワードが保持されるためである。同内容の物語であるために、物語構造とキーワードが変化しないのだといえる。反対に、Retellings によって変化しない語はキーワードである可能性が高いと考えられる。

現在、同内容の物語を繰り返すという Retellings によって、実際に話者の上達もしくは物語の洗練が生じるのかどうか、繰り返された物語を判定する実験を行っている。さらに、Retellings の回数を3回から10回に増やすことで、本稿の実験で確かめられた現象が継続するのか、あるいは繰り返すうちになくなるのかを検証する実験も行っている。これらにより、同一人による Retellings は、何回程度で上達と洗練が打ち止まるのかという点も検証可能と考えられる。プレゼンテーションや講義などの練習として効果のある Retellings の回数も明らかにできるだろう。

参考文献

[1] Allport, G., Willard, & Postman, L. (1947). *The psychology of rumor*. New York: Holt, Rinehart & Winston.

[2] Arndt, J. (1967). Role of Product-Related Conversations in the Diffusion of a New Product. *Journal of Marketing Research*, 4, 291-295.

[3] 有元光彦.(1996)."伝言ゲームの言語学的分析". 『日本文学研究』. 31, A25-A35.

[4] Brunvand, J., Harold. (1981). *The vanishing hitchhiker : American urban legends and their meanings*. New York: Norton.

[5] Chi, M., Bassok, M., Lewis, M., Reimann, P., & Glaser, R. (1989). Self-explanations - How students study and use examples in learning to solve problems. *Cognitive Science*, 13(2), 145-182.

[6] 浜田秀. (2001). "物語の四層構造". *Cognitive studies : bulletin of the Japanese Cognitive Science Society*, 8(4), 319-326.

[7] 池上嘉彦.(1986)."日本語の語りのテキストに

- おける時制の転換について”。『記号学研究』, 6(25), 61-74.
- [8] 伊豆原英子.(1998). "独話の性格を形作るもの—話し言葉と書き言葉の視点から—独話教育のための基礎的研究(2)". 『日本語・日本文化論集』, 6, 15-34.
- [9] Koriat, A., Goldsmith, M., & Pansky, A. (2000). Toward a psychology of memory accuracy. *Annu Rev Psychol*, 51, 481-537.
- [10] 楠見孝. (2005). “物語理解における恐怖の生起メカニズム--怪談とメタファー”. 『表現研究』, 82, 17-26.
- [11] Labov, W. (1972). The transformation of experience in narrative syntax. In W. Labov (Ed.), *Language in the inner city: Studies in Black English vernacular* (pp. 354-396). Philadelphia: University of Washington Press.
- [12] Labov, W., & Waletzky, J. (1967). Narrative analysis. In J. Helm (Ed.), *Essays on the verbal and visual arts* (pp. 12-44). Seattle: University of Washington Press.
- [13] Loftus, E. (2003). Our changeable memories: legal and practical implications. *Nat Rev Neurosci*, 4(3), 231-234.
- [14] 西阪仰. (2003). “相互行為としての「伝聞」”. 『言語』, 32(7), 62-69.
- [15] Pratt, M., Boyes, C., Robins, S., & Manchester, J. (1989). Telling tales - aging, working memory, and the narrative cohesion of story retellings. *Developmental Psychology*, 25(4), 628-635.
- [16] Roediger, H., & Mcdermott, K. (1995). Creating false memories - remembering words not presented in lists. *Journal of Experimental Psychology-Learning Memory and Cognition*, 21(4), 803-814.
- [17] Rosnow, R. L. (1991). Inside rumor: A personal journey. *American Psychologist*, 46(5), 484-496.
- [18] Schiffrin, D. (1981). Tense variation in narrative. *Language*, 57(1), 45-62.
- [19] Silva-Corvalán, C. (1983). Tense and aspect in oral Spanish narrative - context and meaning. *Language*, 59(4), 760-780.
- [20] 水藤新子. (2005). “恐怖を喚起する表現とは--『新耳袋--現代百物語』を対象に”. 『表現研究』, 82, 27-32.
- [21] ザトラウスキー, ポリー.(1993). 『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』くろしお出版
- [22] Tversky, B., & Marsh, E. (2000). Biased retellings of events yield biased memories. *Cognitive Psychology*, 40(1), 1-38.